
お試し短編集

reina

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お試し短編集

【コード】

N9010Y

【作者名】

reina

【あらすじ】

作者が今まで書いた小説やこれから書く小説の短編集。たまにネタとかを書いたりするかも？

pixivにて投降した小説も投稿しています。

今の所、BLEACHのみ。

黒き太陽と妖美な獣たち（前書き）

注意

この小説は数年前に書いたものをサルページしたものです。
キャラも若干崩壊しているかもしれませんが。

- ・一護がスれているかも？
- ・キャラが全体的に崩壊？
- ・一護がオリジナルの鬼道を使っていたりする
- ・一護が仲間に裏切られている

それでも読むと言う人だけ次のページに行ってください。

黒き太陽と妖美な獣たち

流れる…血が流れる…

体の至る所から血が流れる…

力が抜ける…刀を握る手の力が抜けていく…

このままでは、殺される！

俺は、こんな所で死ぬ訳にはいかない！！

『一護、今こそ俺を使え！その為の修行をしただろう』

その声に従い、仮面を出現させる。唯の仮面ではない

ヴァストローデ級の仮面だ。鋼皮が体を覆い、仮面が顔を全て覆う。

髪は伸び、ボロボロだった体は瞬時に回復する。

「やはり、仮面の軍勢だったか…」

「ならば、どうする？今の俺を殺せるのか？」

俺を攻撃してきた者に嘲笑うかのように告げる。目の前にいる奴らは、俺の霊圧で尻込みしてしまっている。

「天の刃、地の刃、敵を狙い撃ちし、後悔の念を抱く前に殺せ！天地剣蒼！！」

言霊を紡ぎ、オリジナルの鬼道を放つ。天から氷の刃が降り注ぎ、地からマグマの刃が敵を倒す為に現れ、敵を突き刺す。

「鋼牙の獣に血肉を食わせる。我、敵を食い殺す獣を呼び出す」

さらに言霊を紡ぎ、百頭の狼の様な物を召還した。獣は、敵を食い

殺し臓物を食い散らし敵の霊力を食らう。

霊力を食らい、巨大化する獣は全てにおいて成長を遂げていく。あの程度、成長すると百頭から十頭に融合する。

十頭の霊獣は、俺を守る様に立ちほだかる。

「この霊獣を倒して見るよ」

俺は、さらに自分の霊力を食わせ、もっと成長させる。俺の三倍程の大きさに成長した霊獣達は、敵に牙を向け今にも食い殺そうとしていた。

「行け」

それを合図に最も成長した一頭を残し、襲い掛かる。残った一頭の頭の上に乗り、俺は戦いを眺める。

残った一頭は、甘える様な声を出す。それに気付いて、頭を撫でると気持ちよさそうな声を出す。

「後は、隊長格と副隊長、そして少数の席官か…」

霊獣と戯れている間にほとんどの闘いは終わっていた。

「死神、どうだ？俺の霊獣は」

他の霊獣は、さらに成長していた。一頭も欠ける事無く俺の元に戻って来た。その霊獣達も俺に甘えて来た。

「後は、お前たちのみか…」

「霊獣ごときにわしらが劣るなど」

愚かな死神達が霊獣に霊力を食われても必死に立ち上がり戦おうとする。

「美しいだろう、お前達の霊力を食らい成長したこの子達は…」

確かに霊獣達は、美しかった。銀や赤の様々な色の毛並みを輝かせ、たった一人の王につき従う。

最も美しいのは、俺が乗る黒い毛が光を浴びると赤みを帯び、金色の瞳を持つ霊獣だ。王者の風格を漂わす霊獣は、たった一人の王を守る為にその場にいる全てを威圧する。

「さあ、降参し俺を殺さないと誓うなら殺さないでおくよ。今回の目的は、この子達を成長させる為だからね」

成長した霊獣達の毛並みを確かめる様に撫でる。その柔らかで滑らかな毛並みを愛しむ様に撫でる。

「これだけ美しく、強く成長したのは君達のお陰だ。霊力の提供感謝する」

『貴様らでは、我らに勝つ事など不可能だ。このまま霊力と血肉を食べられたいか』

俺が乗っている霊獣が言葉を紡ぐ。それに死神達は、驚いた。

『我が名は、黒衝』

『我の名は、白零』

『天禍』

『紫邦』

『舞廻』

『奄瀨』

『湊捻』

『南々実』

『些穩』

『燈王』

獣は、順に名乗る。

「自我を持ったか、それだけ霊圧を食らえたのか」

クスクスと苦笑する。しかし、仮面で笑っているのか分からない。

「今日は、もういいよ。戻れ」

俺がそう言つと渋々と十個のブレスレットに変わる。ブレスレットは、両腕に五つに分けて身につける。

「最後は、俺が片付けるよ」

『我らがお主らの最後を飾ろう』

穏やかなその姿に王者の威厳を感じる。斬月と共に刀を握る。

「罪人、黒崎一護。貴様をここで処刑する」

「やってみるがいい、それが出来るのなら」

刀に霊圧を込め、自身にも高濃度の霊圧を纏う。その霊圧は、自身を輝かせる。

「月牙天衝！百閃」

月牙天衝を百の刃に分裂させ、死神達に向かって行く。それをほと

んどない霊力で防ぐ。

「月牙天衝！瞬音」

音も無く、姿を見せず、敵を切り刻む。

「月牙天衝にこの様な使い方があるとは…」

「これは、本当は仲間と大切な世界を守る為に磨いた結果で得た力なのに。それを仲間であつたお前達に向ける様になるとは運命とは皮肉なものだな」

仮面で表情が分からないが悲しそうな顔をしているのを声だけで分かる。

「そして、これが月牙の今の所の最強の型…」

天鎖斬月を高く上げる。死神達は、それを見て身構える。

「月牙天衝！天魔衝火雷」

放った月牙天衝は、黒と白の霊圧を纏い、空気摩擦による炎と雷を纏い敵めがけて突き進む。それを防ぐ事など出来ず、避ける事も出来ず、いとも簡単に食らってしまった。

「また霊獣達の為に君達を生かしておくよ」

『次戦う時は、容赦なく殺すだろう』

仮面を脱ぎ去り、その場を後にする。

その場には、悔しさで雄叫びを上げる死神達がいた。

「罪なき者を罪人にした事を悔いるがいい」

ことは、数年前に遡る。

中央四十六室から護廷にある命令が下された。

『黒崎一護を異端者とみなし、処刑せよ』

その命令に護廷の死神達は、異論を唱えた。しかし決定を覆す事はできなかった。

それを知った黒崎一護は、瀟霊廷に恨みの言葉を唱え、死んでいったとされた。

現世の仲間達と家族以外から記憶の中からも消された。

しかし、黒崎一護は死んでなどいなかった。死んだと思われていたのは、良く出来た人形だった。

黄泉の世界から蘇った黒崎一護は、霊獣を使役し瀟霊廷とその頂点に立つ霊王に復讐する為に動き出した。

霊獣は、死体さえも食らい、成長していった。

そして黒崎一護も虚化の力を完璧に操り、隊長格や王室特務でさえ敵ではなかった。

たとえ満身創痍にまで追い詰めても虚化で回復し、何度も立ち上がり霊獣を成長させる。

今や隊長達を霊獣の餌として生かしておく様になっていた。

また虚化しなくてもその強さは、王室特務の特務隊長さえも凌駕する力を発揮していた。

「お前達を許さない」

『餌になって詫びるがいい』

それだけを言って、自分の殺した死神を霊獣に食わせていた。最初は、万の獣を従えていたが成長させ、融合を繰り返し、強大な力を

持った十頭の霊獣へと成長していった。

十頭の霊獣は、自我を持ち一護の命令にのみ従う。

護廷と王室特務は、一護に負け続けた。

「わしらでは、倒す事など出来そうにありません」

「それでは、困る。奴は罪人、殺してもらわねば困る」

「王室特務でさえ太刀打ちできん相手にわしらが勝てるはずありません」

「ならば、人質でも何でも手段を使って殺せばよからう」

中央四十六室は、鼻息荒く山本に命令する。しかし、家族を人質に取れば効果はあるだろうが一護の更なる怒りをかい殺される事は容易に想像できる。

「そ、その様な方法を取ればあの者の怒りをさらにかう事になってしまいます」

「だから、殺せばよからう」

「あの者は霊力を解放すれば、わしらを気絶させる事などたやすいのですぞ」

殺す前に気絶させられますと四十六室の頭の固い連中は、一護がどれぐらい強いかが甘く見ている。もしも、四十六室の言った様な方法を取れば、今まで使っていなかった霊力も解放し、自分達を殺しにかかるなど目に見えていた。

それほどまでに自分達と一護の力の差は大きい、それこそ天と地程の差がある。

「相変わらず、愚かな連中だな」

本来はここにいないはずの人物の音が響く。声のする方を向くとオレンジ色の鳥が頭上で旋回していた。

「お前達の考えは良く分かった。今日ここに宣言しよう俺達は、これから中央四十六室と霊王を滅ぼす為に動く事を」

「霊王を滅ぼすだ！」

少なからず、その場にいる者達は動揺を隠しきれずにいた。

「さあ、恐怖するがいい」

全てを伝え終わると鳥は、オレンジ色の光となって霧散した。鳥が消えるのと同時に警報が鳴り、霊獣達の霊圧を感じた。

霊獣は、中央四十六室に狙いを定めていた。

『我らが王の命により、中央四十六室を殲滅する』

黒衝は、それだけを宣言すると中央四十六室の全てを破壊し始めた。他の霊獣もそれに続き、邪魔する者の霊力を食らい、成長しさらに食らう。警護の死神も抗う事も出来ず食い殺される。

僅か半日足らずで中央四十六室は壊滅し、次の日には霊王も殺され、王族も全て殺され、生き残ったのは餌として生かしている王室特務だけだった。

王室特務の者達は、霊王襲撃の惨状を語る。

霊獣を従え、一護が乗り込んできた。王室特務は、霊獣に霊力をほとんど食われ動けなくされ、そこで見ていると言わんばかりに境界を張り戦いで巻き込まれないようにした。

王族の遺体は、霊獣に全て食われ、霊王でさえその霊力と肉体を霊獣に食われた。

王族と霊王を食らい、さらに成長した霊獣達と共にまた何処かに行ってしまった。

「おいしかったかい？」

『さすが霊王だな…お前に及ばないが中々美味だった』

さらに成長した霊獣達は、自分達の大きさを自由自在に変える事が出来る様になっていた。そして、今は普通の犬と同じ位の大きさになり甘えている。

「そうか…」

膝の上に乗っている黒衝を優しく撫でる。撫でると気持ちいいのか目を細め、体を摺り寄せてくる。

『我らは、いつまでもお前と共にある。お前を一人にはしない』

「それが一番嬉しいな」

『死神達も敵ではない。アイツらは最早我々の餌だ』

「そうだな。アイツらには相応しい扱いだ」

黒衝は、ペロペロと頬を舐めて俺を元気づけてくれた。俺はそれが嬉しくてちよつと霊力を食わせてあげる。

『やはり、主の霊力が一番美味だ』

「そうか？」

少年は、笑う。獣を従え、死神達に恐怖をそして絶望を植え付け餌にする。

獣は、従う、自ら王と決めた少年につき従う。

その存在を知る者は、恐怖と畏敬の念を込めてこう呼ぶ…

黒き太陽と妖美な獣達

黒き太陽と妖美な獣たち（後書き）

何故か暗めになってしまった。

氷の眠りから覚めし王の願い（前書き）

注意

この小説は、作者が昔に書いた小説をサルページしたものです。

- ・一護がスレかも？（または黒）
- ・仲間に裏切られている
- ・キヤラ崩壊かも？
- ・一護が最強かもしれない

以上の事を許せる人だけ次のページに行ってください。

氷の眠りから覚めし王の願い

「な…んで、みんな…な……」

血に塗れた肉体。

俺の体は、その日殺された。

俺の魂は、死神達に封印された。

長い長い時を眠り続けた。

仲間の死神達に人間として殺され、死神となった俺の魂を封印した。封印されていた間、俺の心を占めたのは悲しみと絶望だった。

俺は、その長い時を精神世界での新月と朔護との手合わせと修行で紛らわせていた。

俺が封印され百年程の歳月が経った。

約百年という気の遠くなる長い時間、封印されても衰える事無くさらに増大する霊力は強力な封印を内側から無理やり破壊した。

パリン

現世の空座町の地下深くの空洞に氷柱に封印されていた魂は目覚めた。

「斬…月……俺は……」

『目覚めたのだ、一護。百年以上の長き時間は、お前の霊力を弱らせるどころか更に高める事になり封印を内側から破壊したのだ』

オレンジ色の髪を持つ少年黒崎一護の隣に立つ、全身真っ黒でサングラスをかけた男が少年の体を支える。

「お…れ、自由…なの」

『そうだ、お前は自由になったんだ。相棒』

その反対の方に少年に似た真逆の色彩を持つ青年も少年を支える。

「新月…朔護……」

『今は、休め。百年以上封印されていたのだから』

『お前の体は、俺が回復させておく』

百年以上の封印で弱り切っている一護を横に寝かせる。すると、疲れているのかすぐに眠りについた。

『朔護…』

『アンタも俺と同じ考えだよな…』

『我々の手で死神達を殺す…だろう』

一護の弱った体を虚化の能力の一つ超速再生を応用して回復させる。

『我らにとつて一護が世界の全て』

『一護を苦しめる者は、誰であろうと許さない』

『『我らは、一護と共に！！』』

眠りし、王に誓う。

尸魂界・瀟霊廷内。

「一護を封印してから百年以上も経ってしまったのか…」

「今更何を言ったって遅い。後悔するな」

「しかし、私はあの時の一護の顔を忘れられない」

十三番隊副隊長になった朽木ルキアと九番隊隊長になった阿散井恋次が一緒に食事を取っていた。

約百年前、中央四十六室が死神代行黒崎一護の処刑を決定した。

全隊長格、副隊長、そして一護と親しかった死神達に黒崎一護を人間として殺し、死神としても殺せと命令が下ったのだ。

全員が反対したが決定を覆す事が出来ず、一護の処刑は決まった。

その時、話を聞いた一護は全力で抵抗した。

生身であつても鬼道を多少なりとも使える様になつていた為、鬼道を使い死神化していない時は鬼道で応戦した。霊力が高い一護の鬼道の威力は凄まじくやっとの隙をついて肉体を殺しても死神化しさらに手ごわくなつた一護は、ずっと抵抗した。

霊力は隊長格を凌ぐほど高く、藍染達との戦いで経験不足だった部分も改善され、さらに虚化という反則技を持つている一護を捕らえる事など心に迷いがある者達にはとても出来なかつた。

そこで一護の力を弱める為に一護の故郷である空座町の地下深くに

封印する事になった。

全隊長格と副隊長で一護を弱らせ、強力な封印をかけ地下深くに眠らせた。

その日から早くも約百年の月日が経ったのだ。

「一護は、たった一人で地下に眠っている」

「ルキア…」

「我々は、本当に大馬鹿者だな。藍染達も一護の協力がなければ倒す事も出来なかったのにその恩人である一護を殺し、封印するなどルキアの体は震えてた。今でも夢に見ると言う絶望と悲しみを帯びた目で自分達を見て封印される一護の夢を

「俺だつて後悔してるさ。だけど上からの命令だったんだ」

「しかし、我々の都合で一護から何もかも奪ってしまった事には変わりない」

一護の人としての人生も生きる時間も何もかも奪ってしまった、つと今にも泣きそうな声で後悔の念を呟く。

「ルキア…」

慰める様に手を握る。そしていつの間にか二人とも泣いていた。

封印から目覚めた一護は、一先ず地上に出る事にした。

「ここが空座町なか？」

百年以上の時が経ち、昔の面影が全くない街を茫然と眺める。

家族も死に、仲間も死に、友も死んだ。

墓場に行くと言った皆の名前が書かれた墓地と自分の名前と家族の名前が書かれた墓を見つけた。

「俺…死んだんだ」

今更だが殺されてすぐに封印されたのと同じなのでまともに認識出来ていなかった。

「死神…俺を殺した奴ら」

最早一護は、死神を名前で呼ぶ事は無い。

『今考えている事がわかるぞ。死神達に復讐したいと願うなら我ら

も同じ考えだ』

『俺達がお前を守ってやるぜ』

「ありがと、斬月、朔護」

かくて刃は振り下ろされた。次なる敵は死神。

一護は、ある場所を目指す死神達の元へ行く為の扉がある場所に

昔と変わらぬ、場所にある秘密のお店、浦原商店。

「浦原さん……」

その店主浦原喜助に呼び掛ける者あり、真夜中に訪れたお客に驚いた。

「く…黒崎サン」

「百年ぶりかな…お願いがある」

浦原は、心底驚いた。そこは、強力な封印で浦原であっても助け出す事の出来なかった少年が立っていたのだ。オレンジ色の髪が腰のあたりまで伸びているのを見るとどれだけ時が経ったのかが良く分かった。

「瀨霊廷に復讐するんですか、黒崎サン」

「うん、だから穿界門を開いてほしい」

「わかりました。貴方には、その資格がある」

店の中に促す。浦原の後に付いていき浦原商店の地下にある通称勉強部屋に向かった。

「貴方が封印されてからずっと準備していました」

「わしらは、瀨霊廷を敵に回す覚悟はお主が封印された時から出来ておる」

「夜一さん、浦原さん、ありがと」

無表情で礼を言う。浦原は、穿界門を開く。

「イツテラツシヤイ、黒崎サン」

「わしも行くぞ」

タツ！と一護の肩に猫の夜一は乗った。その夜一の毛並みを確かめる様に体を撫でる。

「行つてきます」

そして穿界門に入り走る。瀟靈廷に復讐する為に

穿界門の先は、瀟靈廷の外れに出た。

「瀟靈廷は、変わらない」

「夜一さんは、戦いには手を出さなくてもいいよ。俺一人でやるから」

肩に乗っている夜一に忠告する様に言う。

「いいのか？」

「夜一さんに無駄な罪を与える訳にはいかない」

それだけ言つと抑え込んでいた霊力を解放する。

「さあ、早く来てくれ」

双極の丘で待つ、裏切り者達が来るのを

十分後、そこには全隊長格と副隊長、数人の席官が双極の丘に集まっていた。

「一護、お前なのか？」

「髪は、長くなつてもこの霊圧は俺のだろ」

髪を後ろで一つにまとめ、感情を表に出さず答える。

「高まつた霊圧で封印が内側から自然に壊れたんだ」

『馬鹿だよな。一護の霊圧を弱めるどころかさらに高めるのに手を貸したんだから』

驚愕に目を見開いている死神達を一瞥する。

「何でここに来た」

「お前達に復讐する為だよ」

冷やかな声で答える。まるでゴミを見るかの様に蔑みの視線を向ける。

「お前らの勝手な都合で俺の全てを奪つた貴様らへの」

「つまり我らの敵か」

「その事に関しては百年前から分かっていた事だろう」

白哉の言葉にウンザリした様に答える。

「百年前、俺はお前達に刃を向けお前達も俺に刃を向けた。その時から俺達は敵同士だろう」

「お前と戦いたくない！」

恋次は、皆の心を代弁して怒鳴る様に声を出した。

『では、どうするのだ？お前達は、中央四十六室の一護の処刑の決定を覆す事が出来ていないのだろうか』

「それは……」

何も言えないと誰もが思った。それが真実だったからだ。

「なら、戦うしかないだろう」

「かならず、決定を覆すだから……」

ルキアは、必死に一護に呼び掛けた。それでも一護は、昔の様な反応は全くと言っていいほどなかった。

「百年前：百年前もそう言っていた。だけど覆せなかったじゃないか……信じて待っていたのに帰ってきたら俺を殺そうとしていた」

『お前達の裏切りによって一護の心は限界にまで追い詰められた。いや、壊れかけていた』

『その心を修復したのは、俺達と精神世界で過ごす時間とお前達に対する復讐心だ』

それぞれ百年前の事を口にする。最も死神達の心を痛めた言葉は、一護の半身である斬月と朔護の言葉だった。

(一護の心が壊れかけた…我々のせいで……)

(一護の心を支えているのが奴らとの時間と俺達に対する復讐心だけ……)

皆は、一同に悲しくなった。太陽の様に明るかった少年の心を壊し、自分達に対する復讐心と半身達によって支えられなければ崩壊してしまう心にしてしまった自分達を呪った。

『一護はお前達を殺す事に最早躊躇などない』

斬月と朔護は、刀を死神達に向ける。

そうしていると二つの霊圧がこちらに近づいてきた。

「一兄　　……」

声のする方を見ると一護の妹夏梨と遊子が死神の死覇装を着て瞬歩でやってきた。

「お前ら…死神になったのか」

「お兄ちゃん、何処に行つてたの？」

「心配したんだぞ、クソ兄貴！」

茫然と妹を見る一護の顔を見るとルキアは、何か違和感を感じた。

そしてそれはすぐに分かった。

妹達を見る目に昔の様な優しさが微塵も感じられない事が分かった。妹達を見る慈愛の笑みも優しい瞳の光も微塵も感じなかった。

夏梨と遊子が嬉しさのあまり一護に駆け寄ろうとした。

「近づくな！縛道の一、塞！」

近づいてくる二人に躊躇なく縛道をかける。その行動に周りにいる者達と肩に乗っている夜一さえも驚いた。

「何すんだ、一兄…」

「お兄ちゃん…」

二人が一護の顔を見ようと顔を上げるとそこには、冷ややかで冷たい視線を送る一護がいた。

「死神は、俺に近づくな！」

それを感じた。一護は、死神を心の底から憎んでいる事を

「一兄…何で？」

「それは、ここにいる死神に聞け。こいつらが理由を最もよく知っている」

その言葉に夏梨と遊子が周りの死神を見る。死神達は、二人の視線を避ける様に顔を背けた。

「一体、一兄に何したんだ！」

「それは…」

「簡単な事じゃ。約百年前あ奴らは、一護を処刑しようとし、処刑する事が出来ず空座町の地下深くに強力な封印術で封印したのじゃ」話そうとしない奴らの代わりに夜一が説明する。

「何だつて!？」

今まで知らなかった真実を知って茫然となる。

『もう、一護は俺達以外に昔の様な笑顔を見せる事はない』

『一護の心の中にお前達に対する優しさなど大昔に無くなっている』
斬月と朔護がはつきりと告げる。今の一護に自分達に対する優しさは微塵もないと。

「百年だ。俺は、百年以上も氷柱の中に閉じ込められ眠り続けた。封印を解く為に心を保つ為に精神世界で斬月と朔護の二人と修行して時が過ぎた。

もしも、二人がいなかったら俺は生きていなかったかもしれない。それ位、俺の心は壊れかけていた。そんな俺を支えてくれたのが斬月と朔護だった。

二人は、いつも言ってくれた。

『俺達は、お前と常に共にある。お前を裏切ったりしない』

その言葉が何よりも嬉しかった」

百年の苦しみを何かにぶつける様に話し出した。その話を聞く死神達は、本当に何も言えなくなった。本当は、普通に歩めるはずの人間としての人生を無茶苦茶にして、それを奪ったのが自分達だと本当の意味で痛感した。

夏梨と遊子も何処か狂ったように話す兄を見て、百年以上も閉じ込められる苦しみを想像した。

「俺は、もう死神を信じる事ができなくなった。勿論、お前達もだ」
冷徹な視線を夏梨と遊子に向ける。それだけで昔の一護を知る者は分かってしまった、今の一護は自分達を殺すのに全くと言っていいほど躊躇などなく妹達でさえ殺す事に迷いなどない事を

「だから、俺はお前達を許さない」
背負っていた斬月を抜き、死神達に向ける。

「今の一護には、私達の言葉など届きはしない」

「辛いねえ。上からの命令だからって僕達の行動が一護ちゃんをここまで追い詰めたんだから」

京楽の言葉は、そこにいる全ての者にのしかかった。今の一護を責

める資格など自分達にはない、一護をここまで追い込んだのは自分達なのだから。

「朔護、虚化するぞ」

『ああ、アイツらに絶対の恐怖を味あわせてやるうぜ』

一護の言葉で今にも襲い掛かりそうだった朔護は一護の中に戻る。

ついで斬月も一護の中に戻っていた。

「貴様らに見せてやる。百年前では、自由に出来なかったヴァストローデ級の虚化を…そして完全なる虚化を」

刀を持っていない手で顔に何かを振り下ろすかの様に下げる。すると最初は、虚の仮面が現れ、それが徐々に顔全体を覆い隠し、二本の大きな角が生えた仮面に変わり、体は虚の穴が開き、鋼皮に包まれた。

その姿は、まさに人型の虚だった。しかも霊圧は、隊長格を遙かに凌ぐものと変わった。

「ひやははは！これがヴァストローデ級の虚化だ」

霊圧は、先程よりも上昇し隊長格でさえ膝を地面についていた。

「最後の仕上げだ。『卍解、天鎖斬月』」

止めとばかりに卍解をした。形が変わった死覇装を纏い、大刀は細身の漆黒の黒塗りの刀に変わった。霊圧はさらに上昇した。

「何だ？これ位で辛いのか？」

今にも倒れそうな死神達に意地悪そうに聞く。

「俺を封印したのは間違いだっただよつたな。力を弱める所か貴様らへの復讐心でさらに強くなって帰って来たのだからな」

「クツ！ならば、もう一度封印するまで…」

山本は、何とか体を起こし封印しようとする。それを見て、見下すような笑い声を出す。

「バツカじゃないの！百年前だつて全隊長格と副隊長で力を合わせ俺を弱らせないと封印出来なかった癖にあの時よりも格段に強くなった俺をどうやって封印するのさ」

確かに百年前もあまりの霊圧の高さに全員で戦って霊圧をある程度

下げないと封印出来なかった。今の一護相手にその方法が使えるとはだれも思っていない。

だからこそ、一護は残酷な笑みを浮かべ山本を笑ったのだ。学習能力がないなど笑ったのだ。

「そこまでだ、黒崎一護」

上から声が聞こえると思ったら、見た事もない装束を着た者達がいるた。

「お、王室特務…」

「黒崎一護、貴様を霊王の命により捕縛する」

王室特務と思わしき集団は、斬魄刀を抜いた。

「フーン」

それを確認すると今までここにいる夜一以外の死神達に向けていた霊圧を王室特務に向ける。

すると王室特務でさえ、一護の霊圧に押しつぶされそうになっていた。

「……………なっ！」「……………」

あまりの規格外の霊圧に驚いていた。

「やっぱり、王室特務でもこの霊圧に耐えられないか…」

何かを観察するかのように王室特務を見ていた。

「くそっ！化け物め！！」

「そんな事言ってもいいのか、今ここにいる全員の命を握っているが誰か分からないか？」

自分の対する暴言を吐いた王室特務の隊員にのみさらに霊圧を上げる。霊圧を上げられた隊員は、呆気なく気絶してしまった。

その事にまた驚いた。王室特務の隊員をいとも簡単に霊圧だけで気絶させる事が出来る一護に恐怖と畏敬の念さえも抱かせた。

「これがたかが一介の死神の力かよ…俺達がここまで恐怖を感じた事なんてなかったのに」

「これこそお前達が恐れ、消そうとした力だ。中々の物だろう」

中々どころではない、謀反を起こした藍染達以上の力を持っている。

そして分かってしまった。一護の気分次第で自分達の命や世界を壊す事が容易に出来る事が。ギリアン級の大虚でも虚閃を放てば、町一つをいとも簡単に破壊できる。

だが今の一護は、それより上のヴァストローデ級以上の力で攻撃されれば全てが無に帰すことなど容易に想像できた。しかも、今の一護には、昔の様な甘さなどない。

「本当なら今すぐ殺してやりたい所だが、貴様らよりも先に殺さねばならない奴らがいるんでな。今日は、見逃してやるう」

「何：？」

「それは、誰なんじゃ一護」

気になったのか夜一が死神達に変わって聞く。

「俺の処刑命令を出した。中央四十六室の馬鹿共だよ」

「なるほど」

一護の言葉に夜一も楽しそうに笑う。確かに一番最初に一護を殺そうとした中央四十六室を最初にやるのは当たり前だと納得したのだ。

「じゃあね〜」

それだけ言うと瞬歩で何処かに行ってしまった。しかし十秒後には、中央四十六室を粉々に破壊する一護の霊圧を感じた。

中央四十六室を壊滅させた一護は、隊長格と副隊長、そして王室特務さえもボロボロの瀕死の重傷を与え、瀨霊廷にいた全ての者の記憶を改竄した。中央四十六室を壊滅させたのは、霊王の命を受けた王室特務のせいだと記憶を書き換えたのだ。

そのお陰で中央四十六室は廃止され、その全権は総隊長である山本元柳斎重國の手に渡った。

そして王室特務に紛れた一護によって霊王は殺され、王族も皆殺しにされた。また生き残っている者達の記憶を改竄して、霊王と王族は霊王の座を狙い争い一族全てが死亡したと記憶をすり替えられた。藍染達の反乱の原因である、中央四十六室と霊王を除外し満面の笑みを一護は浮かべていた。

「これがお主の目的だったのか：死神達を恨んでいるというのは嘘だったんじゃない」

「ああ、俺が嫌いになれるはずないだろう」

一護と夜一は、一護が封印されていた氷柱のある地下に来ていた。

「お主を受け入れぬ全てを廃し、もう一度死神として生きる為の演技だった訳か」

「百年かけて描いたシナリオだ。俺は、その為に強くなったんだからな」

感心した様に話す夜一に笑みを浮かべる。そう、全ては中央四十六室と霊王をこの世から消す為の演技だったのだ。

自分を殺す様に命じる中央四十六室と霊王をこの世から消し、もう一度だけでも皆と過ごしたいと願い百年前から考えていたシナリオだ。

「わしもうつかり騙されたのう」

「封印されている時、朔護が教えてくれたんだ」

『お前の存在を許さない全てをなくし、もう一度皆と歩めばいい』

満足げに呟き、その時を思い出しているのか少し笑っていた。

「霊圧が近づいてくる。お迎えが来た様じゃな」

「ああ」

霊圧は、仲間のルキア達の霊圧だった。そして一護は、もう一度氷柱の中に入る。

劇の幕は閉じた。全てを取り戻す為の演技はもういらぬ。

これからは、封印されていた百年間を取り戻す為に生きよう。

俺の存在を否定する者へ

もしも、俺の幸せを破壊する気なら君の存在を跡形もなく消し去るよだってやっ取り戻したんだ。仲間の温もりも家族の温もりも

百年以上待ったんだ。もう二度と手放さない
もしも邪魔する者あれば、俺は躊躇無く牙をむく獣になる
獣となった俺を誰も止める事はできない
だって俺は、その為に強くなっただから

氷の眠りから覚めし王の願い

氷の眠りから覚めし王の願い（後書き）

ご意見、ご感想をお待ちしています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9010y/>

お試し短編集

2011年11月29日00時59分発行